

記念講演 「保険学会から見た隣接学会の動向」

— リスク、保険、経済、地域、生活をキーワードにして —

酒 井 泰 弘（龍谷大学、元日本リスク研究学会会長）

（滋賀大学、筑波大学；元日本地域学会会長、元生活経済学会会長）

1. リスクの経済思想と背景事情を顧みる

第①期（1700 年頃以前） ヤミの時代、未明期

闇の中で、経済学自体が未確立。（だが、確率論はすでに誕生）

イギリス東インド会社、関が原の戦い（1600）

振袖火事（1657）、ロンドンの大火（1666）、ロイドのコーヒー店（1688）

第②期（1700 年頃から 1940 年頃まで） アベの時代、始動期

D. ベルヌーイ（1738）、アダム・スミス（1759、76） カンティロン（1755）

ラプラス（1812）、マーシャル（1890）、ナイト（1921）、ケインズ（1921、36）

フランス独立勃発（1789）、明治維新（1868）、東京海上保険（1879）

第 1 次世界大戦（1914-18）、ロシア革命（1917）

関東大震災（1923）、第 2 次世界大戦（1936-45）

第③期（1940 年頃から 1970 年頃まで） ノモの時代、発展期

ノイマン＝モルゲンシュテルン（1944）、ナッシュ（51）、ゼルテン（60、73）、

アレー（53）、サイモン（57）、トービン（58）

広島に原爆投下（1945）、キューバ危機（62）、スプートニク打ち上げ（64）

アポロ月面着陸（69）、大学紛争激化（68-69）

第④期（1970 年頃から 2000 年頃まで） アスの時代、成熟期

アロー（1970）、アカロフ（70）、スペンス（74）、スティグリッツ（75）

ハーヴィッツ（73）、トベルスキー＝カーネマン（74）、ブラック＝ショールズ（1973）

経済学第二の危機（1971）、第 1 次・第 2 次石油危機（73、78-79）

ソ連解体（89）、バブル崩壊（89）、阪神大震災（95）

第⑤期（2000 年頃以降） ミチの時代、再生期

未知のままか、道が見つかるかの岐路。

9/11 同時テロ（2002）、イラク戦争（03）、リーマン・ショック（08）、政権交代（09）

2. 同時多発テロとリーマン・ショック——現代アメリカを考える

21 世紀は「リスクと不確実性の時代」。学問の「チェンジ」が求められている。
アメリカ発の二つの大きな事件。

① 2001 年 9 月 11 日、「同時多発テロ」の発生。

その後の「双子の戦争」（アフガン戦争とイラク戦争）は、今や泥沼化。

② 2008 年 9 月 15 日、「リーマン・ショック」。

その前後にも、ファニーメイとフレディメイが破綻、AIG も経営悪化で政府から救済融資、「ビッグ・スリー」も瀕死寸前の状態。

19 世紀から 20 世紀初頭にかけては、大英帝国が覇権国家。第 2 次大戦前後には、世界の政治経済の中心は、イギリスからアメリカへ移動した。それでも、戦後 50 年は「米ソ冷戦」が続いていた。1989 年のソ連崩壊後、アメリカ流の「市場原理主義」や「グローバル・スタンダード」がこの世の春を謳歌してきた。

ところが、上記の二つの大事件によって、アメリカ流の経済社会の意外な（あるいは当然の？）脆弱性が露呈してきた。

自分自身の留学経験からして、「アメリカは実に特殊な国だ！単なる直輸入は要注意だ！」としみじみ感じている。

3. 目先の利益か長期の信頼か——近江商人に学ぶ

「百年に一度」といわれる大不況の到来は、人々に対して価値観と生活様式のチェンジを求めている。

目先の金銭計算か、それとも長期的な信用確保か？ここで、「近江商人」の活躍と教えに注目したい。

● 「三方よし」（売り手よし、買い手よし、世間よし）の精神

● 「薄利広売」、「存して得とれ」

● 「星と天秤棒」（松井家の店印）——勤勉とバランス感覚

アメリカの友人からの切ない手紙を読んで、日本のあるべき姿を考えている。

近江商人の精神、つまり長期的な包容力のある「グローバル」(global+local)な精神と倫理の再確立が、今こそ世界に必要なだと信じている。

参考文献

酒井泰弘（2006）『リスク社会を見る目』岩波書店

同（2009）『リスクの経済思想』ミネルヴァ書房（近刊）

水島一也編著（1995）『保険文化——リスクと日本人』千倉書房

田村祐一郎・高尾厚・岡田太志編著（2008）『保険制度の新潮流』千倉書房

小倉榮一郎(1980)『近江商人の系譜』日本経済新聞社